

教育力の及ぶところ児童は勿論、中等高等の学生から町の青年、同僚、先輩にまで、常に「野村君は実に偉い。真の教育者は野村君に初めて見ることに出来る」とまで激賞されていた。実に兄が人々へ無言の感化を見る時、真の教育は言論でなく、虚栄でなく、人みせでなく、黙々たる実行、真の無我愛であることと痛感する。吾人が口に教育の真理を説きながら教化善導の實をあげ得ない弱さを反省する時、兄の偉大を思い、兄の真剣と学び、精進以て教育道への為めに尽したいものである。

野村先生から教えを受け友人達は勿論、先生へ誓いに接しただけの人達でも、先生に対する追慕の念は今なお深いものである。忘れ得ぬ数々の追想を載せて先生を偲びたいと思うが、他の機会にゆづつて割愛することにする。

○中隊教練

明治四十三年頃高妻弘道先生が尋常科四年以上の男子の中隊教練を始めた。時には大隊教練もやった。白いモスリンに赤い布で大隊番号の山形を切抜いた大隊旗を持たせ、高妻大隊長のしおがれ声か城山にこたまし一つの威厳であった。

これよりさき大分県下で中隊教練といえ成西園東郎の桂陽小学校が随分鳴らしたものだ。が、以米桂陽のそれは地に落ち、南の佐伯は教練に於て県下の王座を占めるに至った。佐伯の中隊教練は鳴らしたもので、当時小児童の意気もまた熾んなものであった。

○購買部

児童数近年々増加し、児童の学用品の購買力を考慮し、学用品購買部の設置の必要を痛感するようになった。四月十三年四月から購買部を開始することになった。これはいうまでもなく営利とはなれず施設であったが、多少の剰余金を生ずる場合がある。その金は貧困児童の保護資金として備えることにした。開設当時は大賀名八氏が主任として経営した。

この購買部は大賀氏に代つて大崎豊次郎氏が経営し相当長く継続したが、戦時中物資統制によつて経営不可能となつて遂に廢止された。

○石川巖治校長転任し、所田延吉校長を迎える

佐伯尋常高等小学校と併合されて黄金時代を作った石川巖治校長は、明治四十四年四月滿洲関東州の大連大坂場小学校長として出向され、しばらく後任校長決まらざらず首席訓導の矢田熊太郎先生が校長代理をしていながら、七月に所田延吉校長を迎え、所田校長は高知県出身の人でそれまで京都府視学をしておられた。

(明治年間あり・次回は大正年代となる)

便り

(おことわり) 日向三川内へ幼少の日と過ぎ、後佐伯に歸りて、直川高寺、佐伯小学校に寄つて大坂・長谷川先生からの便りが使ひです。先生にも申しあげ、ここに掲げ、会員の皆さんに読んでいただき、はかきに頼むと書かれた全文、原文は、(前)

日向三川内から佐伯へ

大阪 長谷川 等

一九七〇、二、三三年前の便りの中に「佐伯史談」がいつていました。前号が迷い子になつてご親切に再送を頂き感謝に存じました。住所以前に詳細に書いたつもりでしたが何かのまちがいで、「松崎新二丁目七三番」

が、三年前から×番×号式になつております。すな
ませんが訂正しておいて下さい。

昨年十一月二十六日午後一時五十分の間は、瀬谷寺
の西名家、天谷家のお墓にまいり、養賢寺に箕川家(父の
実家)、山名家(西名の従姉妹、山名先生の夫人)、西名家(明治以後の人々)
古賀家の墓参りをしている間に時間がなくなり、家内が
羽柴先生だけはお目にかかつてと言いつつしなから、
平田先生にもお目にかかれる時間がなく、自動車で別府
に急ぎました。中談ありません。

近鉄社長佐伯氏の招待で旧関係者の会がありました
メデ話だけおしました。私も佐伯氏の部長時代から近鉄
につとめ、同氏が社長になるまで十八年間ケンカしたり
した仲ですが、その当時から「身なだの先祖は大分県の
佐伯の豪族の出ですよ」「豊後水道を舟でのがれて伊予
に渡つた一族の手孫ですよ、そして後に藤堂氏の家来と
なり、伊勢へ転住した様」「おから伊予の佐伯、伊勢に
も佐伯姓があるんだが、結局一族系統ですよ」と話して
いました。……今や財界の佐伯は大坂に大きな城を築
き上げて、サンフランシスコにもホテルを出す勢です。
何れ近い内に近鉄バスハローズが佐伯に行くとかいつて
います。佐伯さんへ育てた野郎、可愛がつておいて
下さい。佐伯氏は東大卒業です。弟さんは阪大卒業、軍
医でなくなっています。私の後輩です。

ご苦労様です。惟治終焉の地を何度も訪ねさせて
三川内の歴史を探究して頂きうれしく思います。前々か
ら何かの手がかりにもなると思っておたよりするつもりで
したが、ツイ多忙のままおそまきになりました。鷗野尾
神社(梅水)の由東として子ども時代に分かされたのは、
「佐伯惟治のほらあたを鷗がくわえて来て水にかけた社
だ。」と。後に佐伯領に帰って来て、同じ社や富尾社など

あるに気がつきました。

梅水村に惟治後長の氏子として小浪家、甲斐家の二氏
がある筈で、小浪家の中私と同年令小浪吉郎氏日宮崎農
学校を出た筈です。甲斐家のうちには甲斐文六氏、非常な
秀才で、私の父が世話して宮崎師範学校を出し、後上京
して東京の区長から後日本評ですが。神宮猪股氏にも令
息宮崎師範を卒えて落校の先生になつた人がある筈です。
徒在をれは八十才を越してゐるでしょう。
私は梅水の高い石段のある寺の下の尋常小学校を十二
才で卒えて、今の直川村神原におつた高寺小学校(直川
高寺小学校)に入塾しました。山名先生がやめられて、
高妻弘道先生が校長でした。その職員に私の姉の婿の
安藤一氏がつとめていましたので引きとられて通学する
ことになりました。それで三川内から陸路七里歩き歩いて
カキジ峠を過ぎました。そして三川内から陸路七里歩き歩いて
母も三川内を引上げて旧川原水村へ越して来たわけでした。
私は高妻先生が町に帰られたので、ついで佐伯の由
母西名家にあづけられて佐伯小学校に通学することにな
りました。

この姉おこ安藤一氏こそ、引号記載にある赤木村大庄
屋安藤佐子氏の孫(父は安藤吉郎と言われ、私を愛して
くれた人)。当主は養子です。海軍中尉(?)で、永く佐世
保にいました。私のためにほつた一人です。徳治君にお
おいて詳しくご研究下さい。今は取前クルスですが、
代々、赤木のドウジ(?)に屋敷があつたのですか(義兄
一氏が阪大病院で胃癌でなくなる迄)。又クルスに移りま
した様です。

(余白) 小浪といふは弥生村大坂屋に小浪村あり、そこにゆかりの(族)でし
ドウジ(堂師)と今字を死んでいる)には、安藤大庄屋の屋敷跡あり、
道路にそつて、赤城構之のような石垣があります。(備菓子)

(以上)